

振り返りシートを活用した社会科の授業

－自己評価と学習意欲の関連性－

千田 晴久

はじめに

「どのような授業を行えば生徒の学習意欲は高まるのだろうか？」という問題は、我々教員にとって永遠の課題である。

様々な個性を持つ生徒全員が、「学習意欲」を持って授業に臨む姿は、我々教師が思い描く理想の授業の風景である。

しかし、「学習意欲」を取り扱った研究や発表はあまりにも少ない。過去にも現在にも、その研究・実践は極めて少ないのが現状である。

その理由は、「学習意欲の向上」そのものが、検証が困難で曖昧なものであり、同じような条件で同じ取り組みを行ったとしても、必ずしも同じ効果が出るとは限らないからである。

「学習意欲」とは、「やる気」という言葉で言い換えることができるように、極めて情意的なものである場合が多い。時には、教師の「授業力」以上に、その「人がら」や「外見」が生徒の「やる気」を起こさせる場合もある。

例えば、「優しい先生」や「カッコイイ先生」・「ハンサムな先生」が生徒の人気を集め、その授業は、生徒が「意欲的」であったりもする。「それは、本当の意欲ではない」と考えることもできるが、実際に、生徒が「意欲的」に授業に参加し、成果物の内容の向上や基礎的な学力の定着を観ることができるようになれば、それも一つの要素として考えることもできるであろう。

しかし、そのようなケースで、継続的に生徒の「学習意欲」を高めることができているのか、

ということを追究していくと、やはり、ある程度のところで、限界に達している場合が、少なからず散見される。教師が、生徒の「学習意欲」を高めるためのスキルを持っていないと、継続的な意欲の向上は、難しいということである。

では、教師の「人がら」という言葉はどうか。抽象的で解り辛い言葉ではあるが、「優しい」・「信頼できる」・「相談しやすい」等の言葉に言い換えることができるのではないだろうか。いずれも、生徒にとって「心を開きやすい」という教師像を思い描くことができる。生徒が安心して授業に参加できる教師には、何か共通した部分がありそうである。そのスキルを究明して、教師のあるべき姿を示すことができれば、「学習意欲」の向上に資することができるであろう。

問題は、生徒のどのような力を育てていけば、「学習意欲」の向上に繋がるのかということである。どんなに教師が一生懸命に指導しても、生徒にそれを受け入れるだけの力が備わっていないければ、結局空回りに終わってしまう。

その「力」とは何なのか、参考となる事例は必ずしも多いとは言えないが、これまでの実践事例を通して、その姿を解明していきたい。

I 生徒が意欲的に授業に参加している状態

生徒が意欲的に授業に参加している状態とは、どのような状態なのか。これらを思い描きながら、生徒の「学習意欲」向上のために必要

な手段を検討していきたい。

1 生徒が学習を面白いと感じている状態

「なんだ！もう、授業が終わっちゃったよ！」という生徒の呟きが聞こえたとき、私は心の中で快哉を叫んだものである。

「時間の経過が早く感じられる」ということは、それだけ集中していたということである。生徒が「意欲的」に授業に参加していた証であると言える。

面白いテレビドラマやゲームをやっていると、思わず、時間の経過を忘れてしまうものである。

また、面白いテレビドラマが、放映時間の関係で、ストーリーの途中で終わってしまい、その続きは次回となった時、一刻も早く、その先を知りたいと我々は思うであろう。ストーリーの切り方にも、視聴者の「意欲」を高める絶妙なものを感じるが、何よりも、次回の展開が気になって仕方が無い。

これを授業に置き換えると、次第に盛り上がってきた内容が、一番知りたい部分の直前で、次回に先送りされてしまった時の感覚と似ていないか。生徒はその意図的に隠された部分を早く知りたくて、自分で調べようとするかもしれない。

また、「話し合い」の授業が、次第に盛り上がり、意見交換が活発に行われている最中に、授業終了のベルが鳴り、この続きは次回となった時、一刻も早く、次回が来るのを待ち焦がれる状態にも似ている。中には、次回に備えて、入念な準備をする生徒も出てくるかもしれない。多くの生徒は、今回の話し合いのやりとりを、頭の中で繰り返し反芻し、より良い状態で次回に臨もうとするであろう。

いずれにしても、このような状態は、生徒の「学習意欲」がかなり高まっている状態であり、知識の獲得や次回への準備に、生徒がフライングをするような行動が観られるようになる。

我々教師は、この「フライング」を生徒が自主的にできるよう、意図的に演出したいもので

ある。

2 生徒が学習目標を見つけた時

「よし！このようにやればいいんだな！」という生徒の言葉を聞いたことがあるだろうか。これは、「歴史絵日記」の優れた作品を教室に掲示した時、聞こえてきた言葉である。

「治承・寿永の乱」は、「平家物語」等にも残されているように、歴史的にも非常にドラマチックな部分である。これを絵日記風に生徒に描かせ、優れた作品を掲示したところ、前記のような感想が聞こえてきたのである。次回の絵日記は、とてもドラマチックな「天下統一」の部分で行うことを告げていたため、その目標となったようである。

我々は山に登る時、「どの山に登るのか」「頂上までの時間がどれ位なのか」ということが解っていれば、たとえきつい登りでもがんばることができる。しかし、登る山も良く解らず、何時間かかるのかということが解らなければ、ただひたすら辛いだけであり、途中で挫折してしまうかもしれない。

このケースでは、その生徒は、社会科が得意科目であり、いつも「意欲的」に授業に参加していたにも関わらず、絵はあまり得意では無かった。どう描いて良いか思い悩んでいる時、優れた生徒の作品を観て、「意欲的に」絵日記に取り組むようになった、という点で山登りと良く似ている。

このことから、「到達目標」が明確になれば、「学習意欲」が高まるということが言えるようである。

3 生徒が学習の方法を理解した時

「よし！こうやれば頭の中が整理できる」と言った生徒がいた。

この生徒は、いつも真面目に授業に参加しているが、なぜか、発言をしても内容が当を得て折らず、微妙にずれていることが多かった。また、定期試験の結果も、あまりパツとせず、次第に自信を無くしていく日々であった。

原因は、授業内容をしっかりと理解できてい

ないまま、先へ進んでしまっているために、中途半端な状態のまま、様々な問題が起きているということが解ってきた。

いろいろと話を聴いていると、「説明を聞いて理解する」ことよりも「文字や絵を活用して自分なりの表現や具体的な例をあげながらノートを整理する視覚による理解」の方が、その生徒にとって、学習には向いていることが解ってきた。

毎日、一生懸命授業に参加して、教師の話を熱心に聞いているが、実は、話の半分程度しか理解できていないようであった。

しかし、板書を整理し、文字や絵を活用し自分なりの表現や具体例をあげながら授業内容をノートに整理していくと、理解が非常に深まるようであった。

この生徒は、この日から「文字や絵を活用し自分なりの表現や具体例をあげながらノートを整理する」という学習を始めたところ、定期試験でとても良い成果をあげることができるようになった。また、学習に対して、自信を持って臨むようになり、的確な発言もできるようになってきた。

その後、この生徒は、どの教科にも同じような方法で授業内容を整理するようになり、バランス良く力が付いていった。

人はそれぞれ、得て不得手がある。それらを総称して「個性」ということもできる。

これらの個性を上手に引き出し、学習意欲の向上に資することができるように考えていくのも、教師の役割であろう。

次に、その生徒が具体的に工夫して理解が深まった例をあげておく。3年生のAさんの例である。「親族・血族」の「親等」の部分で、親等と実際の親族関係のイメージがなかなか結びつかないようであったが、授業内容を整理するにあたり、実名を記入することによって理解が急速に深まった実践例である。特に「従兄弟」との婚姻が可能であるということを知った時の驚きはかなりのものだったようである。

(教師の板書)

親等と婚姻

(親 等) 身近な例

- 1 親等 両親・子
- 2 親等 祖父母・孫・兄弟・姉妹
- 3 親等 おじ・おば、甥・姪
- 4 親等 従兄弟

(親 族)

- 6 親等以内の血族と3親等以内の姻族
 血族 血のつながりある親族
 姻族 婚姻による親族

(婚 姻)

直系血族と3親等以内の傍系血族は婚姻できない(民法734～736条)

(生徒のノート整理)

親等と婚姻

(親 等)

- 1 親等 パパ・ママ
- 2 親等 おばあちゃんと弟のタカくん
- 3 親等 栄おじさん(パパの弟)
- 4 親等 リョウちゃん(栄おじさんの子)

(親 族)

栄おじさんや従兄弟のリョウちゃんまで身近な親族。ママのお父さん・お母さんとママのお姉さんも親族。

(結 婚)

従兄弟のリョウちゃんとは結婚できる？
 えええ……。民法で決まっている！

II

「学習意欲」を高めるために、育てていきたいものとは、「自己評価力」であると考えている。「学習意欲」の向上のためには、後述するように、教師や周囲の人達の指導やアドバイスは欠かせないが、私は、何よりもこの「自己評価力」を育てていくことこそが、必要であると考えて

いる。

1 自己評価力とは

「自己評価力」とは、「自分の事が解る力」である。

「自分のことが解る」ということは、「自分の得意な部分や不得意な部分が解る」ということである。大きな意味では、自分の特徴を自分自身で理解できている状態であると考えて良い。

また、学習面において「自分の事が解る」ということは、「自分の学習の状態が解る」ということである。つまり、現在の自分は、「何が理解できていて」「何の理解が足りていないのか」ということが、解るということである。

「何が理解できているか」、ということが解れば、学習に対する達成感を味わうことができ、自己肯定感も向上するはずである。そして、自信を持って授業に臨むことができるようになるはずである。

また、「何が足りていないのか」、ということが解れば、その克服のための「学習目標」が見えてくるはずである。「学習目標」が明確になれば、そこに向かって段取りを組むことができるはずである。

その時、「自分の特徴」を理解していれば、それに合わせて段取りを組んでいけば良いのである。

自分の力で「学習目標」を掲げ、「段取り」を組み、学習に取り組んで、目標に到達することができれば、それは大きな自信となり、「意欲的」に授業に取り組むようになるはずである。

2 自己評価力を育てるためには

「自己評価力」を育てるためには、「教師の役割」・「周囲の人達の役割」と「本人の姿勢」が必要である。この役割について、順番にポイントを述べていきたい。

(1) 教師の役割

教師は評価者である

生徒の「自己評価力」を育てるためには、指導者である「教師」の役割はとても大きい。

先ず、教師は、自分自身が「評価者」である

ことを、しっかり自覚する必要がある。

教師の言葉・素振り・仕草・視線などのあらゆる行動は、生徒にとって「自分への評価」として受け取られているということを感じておく必要がある。逆に、教師はこのことを自覚することによって、効果的に生徒に接することにより、生徒の「自己評価力」を伸ばすことができる。

生徒の特色を理解する

教師は、一人ひとりの「生徒の特色を理解する」ことが、何よりも大切である。

生徒の特色は、一人として同じものは無く、全員違うと考えて良い。一人ひとりを理解することは、とても大変なことではあるが、これは教師の役割として、絶対に外してはならないことである。

教師は、生徒一人ひとりの特色を理解し、その特色に添ったアドバイスや指導を与えていく必要がある。

また、教師は、集団としての生徒の特色をも理解する必要がある。

クラスやグループ(班)によって、集団としての特色が異なるはずである。集団として生徒を捉えることにより、授業の展開に工夫を加えることができる。

例えば、「ムードメーカー」のような生徒が居るクラスでは、「ここ一番授業を盛り上げたい!」という場面で、その生徒の発言を活用し、評価することにより、活発な授業が展開できるようになる。

生徒の優れた部分に目を向ける

教師は、「生徒の優れた部分」に目を向ける必要がある。人間は本能的に、相手の弱点を探すことはとても上手であるが、優れている部分を見つけることは、意外と難しいものである。しかし、生徒の「自己評価力」を伸ばすためには、意識的に生徒の活動を観察し、「優れている部分」を発見し、それを生徒に伝えていく必要がある。

生徒にとって、教師から「自分の優れた部分」

を伝えられることは、非常に嬉しいことである。「評価者」である教師から、「嬉しい評価」をしてもらえれば、生徒の自己肯定感は大きく向上するはずである。そして、授業に対しても「意欲的」になっていくはずである。

また、教師からの言葉は、「意外な自分の発見」に繋がる可能性もある。大人も同じであるが、自分自身のことは、意外と解っていないものである。「新たな自分の発見」は、自分自身への自信となるはずである。

授業目標を明確に示す

教師は、「授業目標を明確に示す」必要がある。毎日、何となく授業を進めるのではなく、「今日は、ここをやります」ということを、明確に生徒に示す必要がある。

前述の山登りと同じで、「目標が明確」であることは、「安心して取り組める」ということである。

同様に、「授業目標が明確」になれば、生徒は「どこまで理解すれば良い」か、ということが解るようになるはずである。逆に、「授業目標に到達していない」ということが解れば、自分の「足りていない部分が明確」になるはずであり、次の「取り組み目標」を設定しやすくなる。

教師は、その「取り組み目標」に向かって、生徒の背中を優しく押してあげれば、生徒は安心して自信を持って、「取り組み目標」に向かって学習を行うはずである。教師の「承認」は、生徒にとって大きな力になるはずである。

授業の振り返りを行う

教師は、授業の終わりに、「授業を振り返る時間を設ける」必要がある。この「振り返り」が習慣として行われるようになれば、毎時間生徒は、自分自身を見つめる時間を持つことができる。この時に、「振り返りシート」を用意して、記入させると、より効果的である。

「振り返りシート」は、簡単に短時間で記入できるものが良い。いっぱい書くことが義務になってしまうと、苦痛である。

私は、B4サイズのボール紙を「振り返りシート」として活用している。これは、ボール紙を長辺方向に3回折るだけで、片面に8つのマトリックスができる。この一つひとつが、1時間毎の振り返りシートである。

このシートには、せいぜい3～4行も書けば、一杯になってしまう。私は、それで充分だと考えている。

記入内容は、「授業の感想」や「理解したこと」・「理解できていないこと」などを記入して貰うようにしている。

最初はなかなか記入できず、1行書くのもやっとなのであるが、慣れてくると、2～3行は普通に書けるようになる。

教師は、この記入内容に対して、コメントを書いていく。毎回、集めてコメントをするのは煩雑なので、通常は、単元ごとに回収するようにしている。

また、コメントは、生徒の記入内容に対して「前向きに評価」するように書いていく。

教師から、コメントとして文章で誉められれば、生徒は嬉しいものである。

次に「司法と裁判所」を扱った際の「振り返りシート実践例」をあげておく。

授業1回目生徒の記入

(テーマ) 法律とは

(感想) 日本が「法治国家」であることが改めて解った。同時に法律は日本の状況に応じて変えていかなければならないということも解った。

(コメント) 法律は守るべきものですが、状況に応じて変えていくべきものであるということが理解できたことは、素晴らしいと思います。次は、どの法律のどんなを変えていくと良いか考えてみませんか？

授業2回目生徒の記入

(テーマ) 裁判所と三審制

(感想) 慎重に裁判を行うために三審制があることが解った。でも、何で行き過ぎた捜査

や誤った判決が未だに出るのか不思議手ならない。最高裁の決定は、ほぼ覆すことができないと聞いているのに、判決が誤っていたら無実のまま処罰されなければならないのか？

(コメント) 残念ながら冤罪は完全になくなっています。無実のまま服役している人もいるかもしれません。どうしたら、そのような悲しいことが無くせるか一緒に考えていきませんか？

授業3回目生徒の記入

(テーマ) ディベート形式の授業

「死刑は廃止するべきである」

(感想) ディベートは燃えた。勝ち負けではなく、無実のまま処刑されるかもしれないと考えたら、せめて死刑だけは無くすべきだと思ったから力が入った。否定側の意見も解るが、命は失われたら、もう元には戻らない。

(コメント) 熱い意見が聞けて良かったです。みなさんは将来の社会や国を創っていく人達です。その熱い思いを忘れないでください。

結果として非常に意欲が高まった授業となり、将来の司法のあり方に高い関心を示すことができた。コメントをする際のポイントは、成長している部分や教師が良かったと感じられた部分を、「私(教師)」を主語にして書いていくことである。前記の事例の場合は、単元の最後に「死刑廃止」をテーマにディベート形式の授業を予定しているので、そこに向けて生徒の意識を高める目的も含めて記入していった。

規準を明確にする

「教師は評価者である」と前に述べたが、そのために「授業目標を明確にする」必要がある。

同じように、「生徒の優れた作品」等を積極的に示し、「評価規準」を明確にする必要がある。「あのよう書けば良いのか!」とか「あのよう発言すれば良いのか!」ということが明確になれば、「目標が明確」になるはずである。

優れた生徒の作品を示すことに、迷いを覚える教師もいるようであるが、自分の評価力を鍛

える意味でも、積極的に行っていくべきであると考ええる。

(2) 周囲の役割

次に、生徒を取り巻く、「周囲の役割」について、述べる。

ここで述べる「周囲」とは、主にクラスの仲間のことである。

中学生の時期は、人によって様々だが、「思春期」を迎え、「第二次反抗期」の時期でもある。我々教師や保護者などの大人は、生徒達にとっては「縦の関係」にあり、「うるさく、鬱陶しい存在」でもある。大人達が親身になってアドバイスをして、素直に受け取って貰えない場合もある。

しかし、仲間のアドバイスや意見は、比較的真摯に聞くようである。「仲間」や「友人」の存在は、保護者とおなじ位、大切な存在であるようである。

私は、中学生の「自己評価力」を育てるにあたり、この特性を最大限に利用する必要があると考えた。

相互評価の実施

「相互評価」とは、生徒がお互いを評価することである。しかし、ここで述べる「相互評価」とは、お互いを指摘しあい、批判しあうことを、まったく想定していない。むしろ、「お互いに認め合い、高めあう」ことを主眼にしている。すなわち、「お互いの優れている部分を見つけ、それを認めていく」ことこそ、「相互評価」の役割だと考えている。

「相互評価」を行うためには、生徒が話し合ったり、相談したりする時間を計画的に設定しておく必要がある。

「ディベート形式の授業」や「調べ学習」等、発表と意見交換を伴う学習形態が、「相互評価」を行う相応しいタイミングである。

しかし、時間の制約が大きい中学校で、このような形式の授業を頻繁に行う事は難しい。何とか、日頃の授業の中でも、「認め合い、高めあう」状況を作り出す必要がある。そのヒント

となったのが、次のできごとである。

「A君という生徒が私のクラスにいた。彼は、先輩や周囲の仲間の影響で、反社会的な行動を多く取るようになってしまった。2年次には、授業にほとんど出なくなり、いつも昇降口周辺に溜まっていた。そんなA君だが、社会科の歴史分野には興味を持ち、授業に顔を出す時もあった。『治承・寿永の乱』の説明をしていた時、A君の顔が輝いているのを観た私は、『屋島の合戦でどんなエピソードがあったか知っているか?』と問うたところ、『扇的を矢で射貫いたんだよね?』と返ってきた。それを聴いた周囲の生徒達から、『すげえな!よく知ってるな!』というような称賛の声が聞こえてきた。A君は、『どうってことねえよ!』という顔をしながら、内心はとても得意そうであった。この出来事がきっかけとなり、A君は社会科の授業に、必ず参加するようになった。」

手前味噌で恐縮ではあるが、これは実際に経験した出来事である。この時、何よりも嬉しかったのは、周囲の生徒達が、すかさずA君の発言を認めたことである。自分の発言が認められたA君は、自分自身に自信を持つことができたようである。

事例のように、生徒がお互いを認め合うということは、生徒にとってかなり大きな刺激となるようである。

「相互評価」は、通常の授業でも、生徒に意識付けができていれば可能である。そのためには、日頃から「お互いの優れているところを見つけ、認め合う」姿勢を育んでおく必要がある。

前向きな発言やアドバイスができるよう徹底していれば、「相互評価」は、常にできると考えて良い。

(3) 本人の姿勢

「自己評価力」を育てるにあたり、生徒本人が、「自己評価力を伸ばしたい」という気持ちが無ければならない。

教師や周囲の仲間からのアドバイスが、本人にとって有効に働くためには、これらを拒否す

る関係であっては元も子もない。

そこで大切なのは、生徒と教師、生徒と周囲の仲間との関係が良好でなければならないということである。

日頃から、良い人間関係づくりを行おうとする前向きな環境が必要である。そのためには、教師が生徒本人との関係、周囲の生徒との関係が良好に保てるよう配慮する必要がある。

III 授業実践の効果

1 良好な関係は「自己評価力」を高めた

生徒と教師、生徒と周囲の仲間、周囲の生徒と教師の良好な関係作りができていれば、生徒の「自己評価力」が高まってくることが解った。「お互いを認めあう」ことは、とても嬉しいことであり、学習に対しても、大いに自信を持つことができるようになってきている。

前述の事例は、仲間の「承認」によって、生徒が「力(自信)」を得て、授業に参加できるようになった。それともう一つ、「前向きなアドバイス」を周囲の生徒が行う事により、「周囲の生徒も自己肯定感」が高まっているということも解ってきている。

「自分たちのアドバイスが一人の生徒を成長させることができた」という成果が、周囲の生徒達に、非常に大きな自信となっているということである。

このため、「お互いの優れている部分を見つけよう」とする姿勢がより強くなり、生徒達にとって、ますます良い環境が形成されていった。

温かい人間関係は安心して授業に臨める環境でもある。

2 振り返りシートは「自己評価力」を高めた

「振り返りシート」の導入は、「自己評価力」の育成に大きな力を発揮した。生徒達は、シートに記入することにより、その時間の授業を振り返ることが習慣となった。事実上、授業の復習を行っているようなものである。

それにより、自分が理解している部分と理解がまだ足りない部分を意識できるようになってきた。そして、次の授業の「学習目標」が明確に見えてきているようである。

さらに、「振り返りシート」の効用は、生徒にとって、自己の変容を確かめるツールとなっていることである。

長期間の記述内容をほぼ一目で確認できるので、以前に習得した内容や、未だ理解できていない部分を確認することができるようになった。

これは、教師の視点からも、非常に優れたものであると言える。回収した「振り返りシート」から、生徒の変容が解るといことは、その生徒に対する指導の方向性が見えるということである。生徒一人ひとりに応じた適切な指導を行うに当たって、この「振り返りシート」は極めてありがたいツールと言える。

3 意欲的に授業に参加する生徒が増えた

「良好な関係の構築」や「振り返りシート」等の活用により、「意欲的」に授業に参加する生徒が増えてきた。

「自己評価力」が育ってくると、「学習目標」が明確になる。それにより、「何を学べば良いのか」、「どこまで理解できれば良いのか」ということが、しっかり理解できているようである。

「振り返りシート」の内容も、「今日は〇〇が理解できた。次は〇〇が理解できるようにしたい。」等の次回の「目標」まで記入する生徒が観られるようになってきている。

IV 今後の課題

1 教師の意識を高める

生徒の「自己評価力」育成のためには、生徒を観る教師の意識を高めていく必要がある。

前述のように、教師はどうしても生徒の「足りていない部分」に目が行きがちである。その意識を改め、「生徒の優れている部分」をもっ

と見つけようとする意識が必要である。

「自己評価力」の育成には、絶対に前向きな言葉（アドバイス）が必要である。生徒に自信を持たせなければ、この力は育たない。

2 あらゆる形態の授業を展開する必要がある

生徒の「自己評価力」を育成するためには、レクチャー形式の授業ばかりではなく、「生徒が活発に意見交換ができる」ような授業や、「生徒が協力し相談しながら取り組む」授業等を計画的に実施するべきである。

生徒が自主的に考え、行動し、発言するような授業こそ、「認めあい」や「前向きなアドバイス」が実践できる絶好の機会である。

時間的な制約がある中で、ぜひ計画的に取り組んで欲しい。

3 継続して取り組む必要がある

生徒が自主的に活動できる授業を実践したり、「振り返りシートへの記入」を実践するにあたって、注意すべき点は、「継続して取り組む」ということである。

「自己評価力」は、短期間で育つものではない。教師が主導し、温かい前向きな環境の構築を行って、効果的な授業を行うのであるから、計画的かつ長期的な視点で取り組む必要がある。決して、短期間であきらめてはならない。